

# 静嘉堂文庫蔵伝為相筆「源氏物語賢木卷」の特色

武田有子

## I 序論

私達が手にする「源氏物語」には、様々の写本が残存している。

周知の如く、これら諸本は藤原定家が校合した「青表紙本」系統、

河内守源光行・親行の校合の「河内本」系統、そして「別本」に分

類し整理されている。

この「別本」の呼称については、池田亀鑑氏『源氏物語大成巻七』  
に、

極めて便宜的な用語であつて、青表紙本でもなく河内本でもな  
いと認められる諸本を、系統分別など考慮に入れず悉く一様に  
「別本」の呼稱において扱つたわけである。従つて「別本」な  
る容器の中には、系統の明らかでない種々様々の孤立した傳本  
が、何の秩序もなく雜然と詰め込まれてゐるわけである。上品

な喩ではないが、屑屋の籠のやうなものである。これは後で分  
類・整理されることを必要とする。

と説かれている。系統の明らかではない「別本」は、従来あまり問  
題にされなかつた。しかしながら、『源氏物語』の研究として、「青  
表紙本」や「河内本」だけでなく、「別本」を見直す必要は大いに  
あるだろう。

「別本」と呼ばれる中に、静嘉堂文庫蔵の伝冷泉為相筆の所謂伝  
為相本がある。これは賢木巻だけである。そして、敬語や文章表現  
で賢木巻中に異彩を放っている。例えば敬語については、青表紙本  
で敬語のない部分にこの本では敬語が存在したり、その逆の現象も  
ある。又この本においては二重敬語が消滅したり、敬語動詞が置き  
換えられる場合等がある。これらの敬語の特徴を調べることは、伝  
為相筆賢木巻の本文が作成された当時の敬語の使用の状況、作成者

の敬語に対する概念を知る手がかりになるのではないだろうか。

さらに伝為相筆賢木巻には、文章表現において多くの異文がある。これらは河内本に接近したり、あるいは國冬本(伝津守國冬筆)に接近したりする。そしてこの本独自の異文も存在する。これらの異文の特徴はこの本の性格を物語ることになるだろうし、ひいてはこの本が如何なる目的によつて作成されたのかに結びつくのではないかと考えられる。

そして、「別本」と呼ばれる伝為相筆賢木巻が青表紙本や河内本の諸本とどのような関係を持っているかを探ることは、『源氏物語』の新たな一面を知ることになるだろう。

## Ⅱ 本論

### 第一章 伝為相筆賢木巻の敬語の特徴

伝為相筆賢木巻(以下為相本と略称する)の特徴は第一に敬語にあると言える。それを青表紙本との比較によつて調べてゆく。なお青表紙本の本文は大成所収の大島本に拠った。

#### (一) 敬語をそろえる傾向

為相本では、青表紙本で敬語のない部分に敬語がつけられたりして、一律にされる傾向がある(以下、用例は、極力為相本の独自異文をあげた)。

(1) [青] (中宮が) 心づきなくおぼされて、瓶にさせせて、廂の柱のもとにおしやらせたまひつ。

[相] (傍線部) かにさせ給て、

(2) [青] 帝、御心動きて、別れの櫛たてまつりたまふほどに、いとあはれにて、しほたれさせたまひぬ。

[相] ①うごきたまひて

② たてまつりたまふ

③ 御しほたれたまふとぞ聞きし

例(1)の主格は敬語がつくべき人物で、青表紙本では文中の動詞には敬語はつかないが、文末に存在するので文全体では敬意を消失していない。又例(2)の帝の行動を示す三動詞の敬語の用い方は、文末ほど重くなってゆく。青表紙本では敬語のつくべき高貴な人物の行動として、最も強調したい内容——それは文末にくる場合が多い——が敬語の用いられ方で明らかにされる。

ところが為相本においては一語一語に敬語が付き、しかも(2)のように同程度にそろえられているので、印象づけられる語がなくなる。理論的に敬語がつけられることが正しくとも、表現上の敬語の効果は消失して、形式的な敬語の用い方と言わなければならない。しかもこの本では、接頭語「御」はついているが、動詞に敬語を補助としてつけることで敬意を示す傾向が強い。

(1)・(2)のように補助動詞「たまふ」がそろえて用いられる傾向があり、全体として敬語が形式化かつ一律化していると言えるのである。

(⇒) 人物間の身分の差による敬語のとりえ方

為相本では、単に敬語が現れるにとどまらず消える場合もある。

しかも、為手尊敬(尊敬語)と受手尊敬(謙讓語)の両者に言えることである。このような現象は如何なる理由によるのだろうか。

まず受手尊敬が為相本でふえる場合について考えたい。

(8)〔宵〕夜居の僧のやうになりはべらむとすれば、見たてまつらむ

こともいとど久しかるべきぞ」とて泣きたまへば、(中宮

の東宮に対する語り)

〔相〕(傍線部)ときこえて

(4)〔宵〕中将、宮の亮などきぶらひつや」などのたまふけはひの、

(右大臣の臘月夜に対する語り)

〔相〕(傍線部)きこえ給

青表紙本では為手尊敬のみであるが、受手に対する敬意がないと単に処理してはならない。これらの現象は、為手の行動を強調するために為手を表現の中心に据えたことによると考えられる。これに対して、為相本には受手尊敬が現れる。しかも、受手の身分が為手のそれと同等に、又はそれ以上に高いと考えられる場合に起こるので

ある。とするとならば、動作主とその動作の及ぶ他者を、常に念頭において敬語を考えていることになる。そして、為手と同等に、又はそれ以上に身分の高い受手に敬語がないのは不条理として、受手尊敬が加えられたと考えられる。

青表紙本では、表現の中心人物が各所で誰であるかによつて敬語表現が左右されているが、為相本では身分の差が敬語を決定していると言えらる。

その身分の差による敬語決定は、受手尊敬がない場合にも言えらる。

(5)〔宵〕心のうちに、いかにぞや、(源氏が御息所を)疵ありて思

ひきこえたまひしのちはた、

〔相〕(傍線部)疵ある心ちし給て、

(6)〔宵〕(源氏が紫の上に)常よりもことにかたらひきこえたま

ふ。

〔相〕(傍線部)かたらひちぎりたまふ。

(7)〔宵〕(源氏が)若君(夕霧)をかしづき思ひきこえたまへるこ

と限りなければ

〔相〕(傍線部)かしづきものに思ひ給へれば、

いずれも為手に対し受手側の敬語がない。為手が受手の父であるという親子関係や、紫の上の場合はわかりやすいが、六条御息所に

も、身分の差による敬語決定に近い現象を呈している。

受手尊敬と為手尊敬が併合されて用いられる場合、作者と作中人物との関係による規定を含む。この表現で作者は為手を通して間接的に受手を敬い、同時に二人の人物に敬意を示す。それは表現の中心に、二人の人物が存在することを意味する。故に青表紙本の受手尊敬は、為手を低くみなすものではない。これに対して為相本の受手尊敬は、作中人物間の身分関係等により決定され、作者と作中人物の関係はおりこめられていない。

では、為手尊敬に対する為相本の態度はどうか。(一)のように、為手尊敬が現れて敬語がそろえられる傾向のほかに、為手尊敬が消える場合のあるのは如何なることか考えてみることにする。

(8)〔背〕まして、おしなべての列には、思ひきこえたまはざりし御仲の、かくて(御息所が)背きたまひなんとするを、

〔相〕(傍線部)背きなんを、

(9)〔背〕女君(紫の上)は、日ごろのほどに、ねびまさりたまへる  
こちして、いといたうしづまりたまひて

〔相〕①ねびまさりたる

②しづまりて

右のように、為相本ではいずれも為手尊敬がない。だが、彼らに対する敬語がすべてこの本において消えるわけではない。消えるのは

源氏と共に述べられている場合である。それは源氏との身分を比較して、差をつけて低くみなしたからと言える。為相本において為手尊敬が、ある一箇所が消えている人物でも、その人物一人だけが、例えば源氏に関係なく表現の中心となる箇所では、その人物に対する敬語は存在する。これは、作者と作中人物の関係からの敬語決定である。しかし、表現しなければならぬ人物が二人になると、作中人物間の身分関係で敬語が決定する。以上により為相本においては、敬語に対する態度が二通りあることになり、徹底していないと言える。

また、為相本の受手尊敬は受手への敬意を表すというよりも、為手を受手よりも低くみなす意識が強かったのではないか、と考えられる。

(10)〔背〕(帝が)御容貌も、院にいとよう似たてまつりたまひて、  
〔相〕(傍線部)似たまへるが、

青表紙本は院にも敬意を示しているが、為相本では、院と同等に高位の帝をへり下らせることを非礼としたために、受手尊敬が省かれたと考えられる。為相本の敬語の扱いは、"身分"が大きく影響している。

しかしながら(一)・(二)で述べてきた傾向のいずれにも入らない場合がある。

①〔青〕(中宮が) このこと思ひやませたてまつらむと、おぼしい  
たらぬことなくのがれたまふを、

〔相〕(傍線部) おもひいたらぬ

これは(一)の傾向とは逆で、簡略化の傾向である。しかも、源氏と中宮が共に叙述の対象とされている箇所なので、(二)の傾向とも矛盾する。一方で敬語をそろえ、一方で敬語を消すのは、為相本の敬語に対する態度の不徹底さが現れているのである。

(三) 敬語動詞の置き換えと二重敬語の簡略化

これまでは大体敬語の補助動詞について考えてきた。次には敬語の実質動詞について考えることにする。

②〔青〕(出家を) おぼし立たせたまへるうらやましさは、限りな  
うと。(源氏の中宮に対する語り)

〔相〕(傍線部) おぼしめしたたせ給へる

「思ひ立つ」の最高敬語「おぼし立たせたまふ」であるが、「おぼす」から「おぼしめす」への移動の例で、この為手は中宮である。

「おぼしめす」は「おぼす」の連用形に、尊敬語の補助動詞「召す」のついたさらに敬意の高いもので、「思ふ」の最高敬語である。源氏物語においては、最高敬語は地の文では帝・后・東宮・上皇に限り用いられている(注①)。例②は源氏の語りの部分ではあるが最高敬語の対象が中宮であるので、為相本の敬語の用い方は誤っている

ないし、青表紙本よりもっと重くなっている。

しかし、次のような例がある。

③〔青〕(中宮が) 昼の御座にゐざり出でておはします。

〔相〕(傍線部) ゐざりいでたまへり。

青表紙本では、例②の源氏から中宮に対する敬意の表出として「おぼし……せたまふ」を、例③の地の文で作者から中宮への敬意の表出として、「おはす」の最高敬語である「おはします」を用いている。敬意の対象が、どちらも最高段階に属する人物であっても、用いられた語が異なるのは、敬意を表出する場に差があるからである。青表紙本の敬語の使い方は秩序正しく、しかも人間関係を巧妙に浮きだたせている。

これに対して為相本では、源氏の中宮に対する会話にはきわめて重い最高敬語で、地の文で中宮に対しては「おはします」より敬意の軽い「いでたまふ」である。これより、為相本には青表紙本に見られるような敬語の秩序はないと言える。

また、最高敬語は地の文では、源氏や他の人物に用いられることはまずない(注①)。だが、次のような場合がある。

④〔青〕御前の五葉の雪にしをれて、下葉枯れたるを見たまひて、

親王、

〔相〕(傍線部) 御覧じて、

為手の兵部卿官に、為相本では重い敬語が用いられている。以上の三例から考えて、為相本では敬語の段階的な区別がなくなり、最高敬語や重い敬語も、一般的敬語化してきていることがわかる。敬意の差の消失や一般化は、秩序正しかった平安時代からは後世のことである。これより、為相本の本文は、青表紙本の本文よりもずっと後世に作成された、という可能性がでてくるわけである。

敬語動詞の置き換えには、さらに次のような場合がある。

⑨〔青〕上下の僧ども、そのわたりの山賊まで（源氏が）物賜ひ、  
尊き事の限りを尽くして出でたまふ。

〔相〕（傍線部）ものたまはせ、

⑩〔青〕おとなびたるさまにもおしたまへど、まだいと片なりに「

など、（源氏が帝に）その御ありさまも奏したまひて、

〔相〕（傍線部）申給て、

例⑨は「賜ふ」から「たまふ」への移動である（注②）。両者とも「与ふ」の尊敬語なのだが、「賜ふ」は男性用語である。例文は源氏の雲林院での行動を描いており、まさしく男性の世界である。青表紙本では言葉の上からそれがかがえるのだが、為相本では言葉からうける効果は消えている。次の例⑩は、青表紙本の「奏す」が、為相本で「申す」に変わっている。「奏す」は天皇や院に向かって言う場合に使う謙讓語で、源氏物語中おおむね正しく使用されているが、

るが、為相本の例は特例である（注③）。

これらの例から、青表紙本の表現には、その時々に応じた語句をよく選んで使っていることがうかがえる。そしてそのために、文章全体が含蓄のあるものになっている。しかし、為相本にはそのような配慮がみられないため、伝えられる意味は同じでも文章全体は深みのない表現だと言える。

また、敬意の高い表現に「せ（させ）たまふ」の二重敬語がある。為相本は二重敬語をどのようにとらえているか。

⑪〔青〕（院が帝に）東宮の御ことをかへすがへす聞こえさせたまひて、

〔相〕（傍線部）きこえたまひて、

⑫〔青〕（東宮が）夜ふけてぞ帰らせたまふ。

〔相〕（傍線部）かへりたまふ。

⑬〔青〕（院は）御位を去らせたまふといふばかりにこそあれ、  
〔相〕（傍線部）さりたまへる

いずれも青表紙本で、「せ（させ）たまふ」とある所が、為相本では「せ（させ）」がない。例⑪・⑫の「せ（させ）たまふ」は、為手に対する二重敬語であるのが明らかだが、例⑬は少々吟味を要する。なぜなら例⑬は、⑪・⑫と同様に為手に対する二重敬語「聞こえさせたまふ」と考えられると同時に、「聞こえさせたまふ」と

も考えられるからである。後者の場合であると、「せ(させ)」「は  
受手尊敬と解釈しなければならぬ。しかし「せ(させ)たまふ」  
が一連の語となり、あらゆる助詞について高い敬意を表現している  
ので、この場合も「聞こえよさせたまふ」と考えてよいだろう。為  
相本では、「せ(させ)たまふ」の為手への二重敬語から「せ(さ  
せ)」を省き、敬語を簡略にしたと言える。つまりこの本の本文が  
作成された頃には、敬語の段階的区別が消えて、「せ(させ)たま  
ふ」も「たまふ」も敬語一般となり、むしろ助動詞のないほうが文  
章を理解しやすいとしての省略と考えられる。

しかしながら、青表紙本中の「せ(させ)たまふ」がすべて「た  
まふ」になるわけではない。青表紙本で「たまふ」の部分が、為相  
本で「せ(させ)たまふ」とされている場合もある。

例④〔青〕(源氏の御息所に対する語り)かう注連のほかにはもてな  
したまはで、

〔相〕(傍線部)もてなさせたまはで、

例⑤〔青〕六十巻という書読みたまひ、おぼつかなきところどころ解  
かせなどしておはしますを、

〔相〕六十巻というまきよませ給、おぼつかなきところどころか  
きなどしておはする

いずれも為相本では「せ(させ)たまふ」の形をとっている。しか

し、これらは為手に対する二重敬語と考えるよりも、使役の助動詞  
「す(ます)」「とするのが妥当である。

例⑥の場合、御息所は源氏を直接にもてなすのでなく、女房を通  
してもてなすのである。高貴な人物の交際に女房が介在しているの  
は当然のことであるから、為相本では、「女房をしておもてなしに  
ならないで」と解釈して助動詞をつけ加えたのではないかと考えら  
れる。例⑦の青表紙本では「源氏自身が書を読み、不審な点を僧に  
解かせた」ととれる。為相本でも「源氏自身が読んだ」と解釈でき  
るが、「僧に読ませて、不審な点を源氏が書いた」とも解釈できる。  
この叙述の部分には僧が関与しているため、「僧をして」となる使  
役の可能性はある。

ここでもう少し助動詞「す(ます)」「について考えてゆきたい。

例⑧〔青〕(源氏が)御使とどめさせて、唐紙ども入れさせたまへる  
御厨子<sup>③</sup>あけさせたまひて、(注④)

〔相〕①とどめさせ給て

②入れたまへる

③あけさせ給

青表紙本賢木巻の地の文では、「せ(させ)たまふ」の二重敬語は  
帝・后・東宮・院の最高段階に限り用いられ、源氏にはほとんど例  
がない(注①)。しかも、高貴な人物は自ら直接に使いを引き止め

たり、御厨子をあげたりはせず、召使いにさせるのである。よつて青表紙本の「せ(させ)」は、使役と考えるのが妥当である。「入れさせたまへる」についても、この部分のみを為手への二重敬語と考へず、同様に使役と考へるべきである。為相本でも、同様に召使いの介在を考慮して使役と解釈したのではないか。ただ、「いろいろの唐の紙を入れる」を源氏直接の行動と考へたために、「させたまふ」の「させ」を省略したと考へられる。

助動詞「す(ます)」が、使役か尊敬かを判断することは困難である。もともと、人を使って事をさせることのできる身分とみなすところから、敬意の表現が生まれてくるからである。為相本では、尊敬の度合が強いと思われれるものは省略し、使役の度合が強いものは残存させた。そして人を使用したと考へられる部分には「す(ます)」をつけ加えている。つまり為相本は、助動詞の使役の意味に重点を置き、二重敬語を簡略化する傾向を持っていたということになる。

以上、敬語の様々な傾向を述べてきたが、為相本の敬語認識は青表紙本ほど徹底していいことがわかる。それは為相本の本文が作成された当時の人々の敬語認識、かつ作成者の認識によるものである。しかも、為相本は敬語を作品中に有効に用いるのでなく、形式化し或いは簡略化している。

## 第二章 文章の平淡な叙述

### (一) 作者と作中人物の分離

為相本では、青表紙本と文体の異なる表現が随所に出てくる。それらについて考へてゆきたい。

(1)「宵」ほどなければ、御けはひも、ほのかなれど、なつかしう聞こゆるに、つらさも忘られて、まづ涙ぞ落つる。

〔相〕(傍線部) まづ涙ぐまれたまふ。

(2)「宵」この女君のいとらうたげにて、あはれにうち頼みきこえたまへるを、振り捨てむこといかたし。

〔相〕(傍線部) ふり捨て給はん

例(1)は久しぶりに中宮に会えた源氏について叙述している部分である。源氏の行動なので理論的には為相本のように敬語がつくことが正しい。しかしながら、青表紙本には為相本にない緊迫感が文全体にある。敬語のない言い切りが源氏の行動を強く打ち出し、しかもそれが作中人物の行動にとどまらず、作者までが参加した、そして読者(又は聞き手)までも引き込んだものになっている。作者の視点<sup>1)</sup>が作中人物のそれと一致しており、平淡な叙述ではない。

けれども、為相本では敬語が存在するために、作者が作中人物から離れてしまう。

例(2)も源氏についての叙述ではあるが、同様に青表紙本で敬語が

用いられていない例である。そのために、次に続く「いとかたし」が源氏の思いつよく即したものとなり、それが読者まで引き込む効果がある。だが、為相本では敬語があるために、やはり作中人物の行動を第三者の立場から叙述したことになる。

つまり、為相本では作者が作中に入ることがなく、作中人物と常に一定の距離を置いた客観的表現となっているのである。敬語は作品のあり方を大きく左右する。敬語の有無から、為相本は作者の視点が固定して、冷静な文章になる傾向があることがわかる。

#### ⇒ 心語文の地の文化

源氏物語の文章中には、作中人物の会話文の他に人物の心中を示した心語文がある。これは作者の語りである地の文の間に機械に姿を現して、文章を立体的にしている。この心語文に為相本では敬語のつく場合がある。

(3)「青」いとど御心の暇なけれど、つらきものに思ひ果てたまひなむいとはしく、人聞き情なくやおぼし起こして、

〔相〕①つらき物にのみおもひきこえ給はむ

#### ②人めを

宵表紙本では、地の文から源氏の心語文へと移り、助詞「も」でつないで「いとほしく」と源氏の心中を述べ、さらに心語文へと移動する。連用修飾語の「いとほしく」は作者の判断の入った表現で、

地の文と心語文の両性質を持ち、上下の心語文をうまくつないでいる。

けれども、為相本には「きこゆ」の源氏に対する受手尊敬があるために、傍線部①は心語文でなくなり、さらに傍線部②もこの本では、「人めを」となって心語文でなくなる。

(4)「青」かならず人笑へなることはありぬべき身にこそあめれ、など、世のうとましく過ぐしがたうおほさるれば、

〔相〕(傍線部)人わらはれなることはありぬべき御みなりと、これは、中宮の心語文に接頭語「御」がついた例だが、これによって為相本では傍線部はやはり心語文ではない。

源氏物語の文章は、地の文と心語文が錯綜して重層的な文章を構成しているが、敬語は心語文を地の文化してしまうので、為相本は平淡な文章となる傾向がある。これは(→)で述べた作者の視点が固定して、文章が客観的になると同性質のものである。

#### ⇒ 草子地の地の文化

源氏物語の文章に草子地という独特の文体がある。草子地とは、話主が作中場面から抜け出て語り場面に返り、話主自身の感想や批評を語るものであるが(注⑤)、この草子地が為相本では、一つの傾向を示している。

(5)「青」このついでにさるべきことも櫛へ出でむに、よきたより

なり、とおぼしめぐらさるべし。

〔相〕これにつけても、だれもだれもさるべき事構へ出でむに、よきたよりと、いひひしきつべきことのはじめとをぼす。

青表紙本の傍線部は、『湖月抄』なら「草子地也」とするところであろう(注⑥)。この部分は、草子地として大后の心中を付度したのである。これは文末の助動詞「べし」によって明らかである。この「べし」は推量を示すもので、作者の判断であることがわかる。だが、為相本では「べし」が省略されている。為相本では推量する作者の姿勢が消えて、大后について叙述する地の文となっているのである。

文末の推量を示す助動詞の同様の例を挙げると、

(6)〔霄〕御心のうちは、思ひのほかなりしこともを忘れがたく嘆きたまふ。いと忍びて通はしたまふことは、なほ同じさまなるべし。

〔相〕(傍線部)いとしのびてはことかはしたまふ事も、をなじやうなり。

右のように為相本では省略される。単なる地の文である。この部分も『湖月抄』では草子地としていないが、作者の判断が示されているのは確かである。草子地についての規定は様々で諸注によっても判断が異なる(注⑦)。諸注に草子地とされていなくとも、作者の

判断が出ている部分は考慮しなければならない。

草子地が地の文化されると言っても、本文中のすべてがそうであるわけではない。むしろ為相本においても、草子地としての姿勢にわかりやすい所の方が多い。では、草子地でもどういった場合に地の文化するのだろうか。

(7)〔霄〕我にもあらでおはするを、子ながらもはづかしとおぼすらむかしと、さばかりの人はおぼし憚るべきぞかし。

〔相〕あれにもあらでおはす。子ながらもはづかしとおぼさんところを、さばかりの人の御なからひはおぼし憚るべきぞかし。

例は草子地から右大臣を批判している。青表紙本と為相本は表現の違いこそあれ、草子地としての姿勢に変わりはない。このような批評やまた作者の断りを示す草子地には、地の文化は見られない。これらは、作中場面に立ち合っている立場から完全に離れて、語り場面での立場がはっきり打ち出されるので、地の文化は困難であったと考えられる。これに対して地の文化するのは、人物の行動を推量する草子地である。この場合は作中場面から完全に離脱したとは言えず、作中を語る態度の方が強い。よって、地の文化は容易である。

為相本には、文を一律の表現に置き換える傾向があることを本章

で述べてきた。この傾向は、青表紙本の持つ重層的な文章とは性質を異にし、為相本全体を平淡でそして客観的物語文章に近づけさせているのである。

### 第三章 文章表現の単調化と説明的要素の添加

#### (一) 複合動詞の単調化

青表紙本と為相本を比較すると、前者に複合動詞が多く、それが後者で単純な動詞に置き換えられている。

(1)〔青〕「あなたは、篋子ばかりの許されははべりや」とて、上り  
ゐたまへり(注⑧)。

〔相〕(傍線部)のほり給へり。

(2)〔青〕人わろきこちしたまへば、おぼしとまりて、つれづれに  
ながめりたまへり。

〔相〕(傍線部)うちながめられたまふ。

(3)〔青〕いと心憂く、宿世のほどおぼし知られて、いみじとおぼし  
たり。

〔相〕(傍線部)おぼされて、

(4)〔青〕帝は、故院の、やむごとなく重き御後見とおぼして、長き  
世のかためと聞こえおきたまひし御遺言を

〔相〕(傍線部)きこえ給し

この傾向の中で特徴のあるのは、まず例(1)と(2)の「ゐる」の複合動詞が為相本で省略される場合である。「ゐる」は、例(1)のように「存在する・すわる」という意味を表す場合と、例(2)のように動詞の連用形につき、動作や状態の継続を表す補助動詞として用いられる場合がある。為相本の「ゐる」の省略は、人物の行動をより単純に表現していると言える。また、例(3)の「思ふ」系の動詞の複合動詞、例(4)の受手尊敬「きこゆ」の複合動詞にも特徴がある。これらは、先の二例と違って「思ふ」「きこゆ」が残され、それらに附随する行動表現が省略される。やはり表現が単調になったと言える。

複合動詞は人物の一つの動作を二つの動詞で表現するので、表現が非常に詳細・繊細になる。それが単純な動詞に置き換えられると、文脈の理解に支障をきたさなくても、深みのない、味わいの薄い表現になってくるのである。

#### (二) 副助詞「など」に見られる特徴

青表紙本と為相本では、副助詞「など」の異同が目につく。このことは為相本の如何なる性質と結びつくのだろうか。

まず、会話文や心語文に続く「など」は、

(5)〔青〕「おほかたの憂きにつけてはいとへどもいつかこの世を背  
きはつべき  
かつ濁りつつ」など、

〔相〕(傍線部) かつ濁りつつなん、と

のように、為相本は格助詞「と」に置き換えている。「など」はもともと類似を示す助詞で、引用句を受ける場合も「大体このようになことを言った」の意味となり、もっと他にもこれに似たことを言ったが要約すると、という意識が入ってくる。よって表現にふくらみが出てくる。引用句の下の「など」には、作中人物を近くで見聞きし、それを要約して語っている人物を思わせる働きがある。

しかし「と」に変わると、その引用句はそっくりそのまま人物によつて言われた言葉となり、そしてそれだけのものではない。このことは表現のふくらみを消し、作中人物を近くで見聞きしている人物をも消して、物語の文章を変化のない一般的叙述にするのである。

さらに、「など」が為相本で消えるのは、

(6)〔青〕宮もまかでたまひなどして

〔相〕宮もまかで給て(傍線部ナシ)

のように動詞に続くものに見られる。これも作中人物の行動のふくらみがなくなり、単調な表現になっていることがわかる。

しかし、「など」が為相本でつけ加えられる場合もある。

(7)〔青〕中宮は院の御はてのことのうち続き、御八講のいそぎを

〔相〕(傍線部) 御はかうの事いそぎなどを

(8)〔青〕こなたかなたの人目しげく、女房どもも懼ちまどひて

〔相〕(傍線部) 女房など

加えられるのは、例(7)のように大抵が名詞に続く場合で、消える場合の傾向とは異なる。そして名詞に続く場合は、例(8)のように「ども」の置き換えであることもある。「ども」は複数を示すもので、もとは「など」とは意を異にするものだが、その区別が曖昧になってきたためによる現象と考えられる。

㊦ 表現の簡略化

これまでは、敬語等の特定の語を取り上げてその特徴を考えてきた。次には全般的な表現について調べてみたい。

まず、その特徴として、為相本は青表紙本に比べると修辭が少なくと言える。

(9)〔青〕御髪おろしたまふほどに、宮の内ゆすりて、ゆゆしう泣き

みちたり。

〔相〕御髪おろさせたまふ程、ゆすりて宮の内なきあひたり。

(傍線部ナシ)

(10)〔青〕たはやく御心にまかせて、まうでたまふべき御住処には  
たあらねば、

〔相〕御心にまかせて、まうでたまふべき御すまひにもあらね

ば、(傍線部ナシ)

例⑨は形容詞「ゆゆし」の省略である。「ゆゆし」は動詞を修飾しているのだが、修飾語のない為相本では、表現に強弱がなく簡略化されている。同じように例⑩も為相本では修飾語が省略されており、文章中の情緒が減少していると言える。

そして、より簡略化のすすんだ、

⑩〔晋〕院にいとよう似たてまつりたまひて、今すこしなまめかし

き氣添ひて、なつかしうなごやかにぞおはします。

〔相〕こ院ににたまへるが、今すこしなまめかしうこまやかにぞおはしますける。(傍線部簡略)

のような場合がある。形容詞や副詞は、為相本ですべて省略されなくとも、その数は減少する。情意を示す語の省略・減少は、それだけ文章に含まれる情緒を薄くする。だが、その反面、簡略化は文脈の理解の助けにはなっている。

さらに語ではなく、句の省略がある。

⑪〔晋〕大臣わたりたまひて、まづ宮の御方におはしけるを、むら雨のまぎれにて、え知りたまはぬに、軽らかにふとはひ入りたまひて、

〔相〕大臣わたり給へり。宮の御方におはしけるまきに、むら雨のまぎれに、軽らかにはるわたりたまひて(傍線部ナシ)

例⑫は右大臣が臘月夜を尋ねて来る場面、右大臣の行動を述べて

いる。為相本で省略されている部分は、源氏と臘月夜の行動であり上下の句と主格が異なる。言わば挿入句である。挿入句は、文脈から考えると、上下の句のいずれとも別のもので文章を複雑にするけれども、上下の句に働きかけて文全体を豊かにする。為相本では挿入句が省略されたため、文章が文脈を中心とした叙述になる。だが、ここでもさきほどの例と同様に、文脈の理解は容易になるはずである。

挿入句と規定することはむずかしいが、上下の句と文脈上別であるものを挿入句、或いは挿入句的性質を持つと考えたと、この性質の句が為相本ではかなり省略される傾向にある。

⑬〔晋〕大臣は、思ひのまきに、籠めたるところおはせぬ本性に、いとど老の御ひがみさへ添ひたまひにたれば、何ごとにかはとどこほりたまはむ、ゆくゆくと宮にもうれへきこえたまふ。

〔相〕大臣は、思ひのまきに、籠めたるところなうをはする御本性にて、をいにさへいたうひがみ給て、宮にうれへきこへたまふ。(傍線部ナシ)

例⑭の傍線部は、上の句とつながりを持ってはいる。しかし、上の句は右大臣の行動を述べた部分であり、傍線部は語りの心をのぞかせた部分となっている。そして、このあとの下の句は、また右大臣

の行動を述べる部分である。よつて、傍線部は上下の句とは性質を異にしており、挿入句の性質を持っていると言える。この部分が為相本では省略される。

このような簡略化は、為相本全体を文脈を中心とした文章にむかわせ、梗概的文章を作っているのである。よつて、為相本は文章に含まれる情緒を味わうより、文脈を理解することを旨とした本であることがうかがえる。

㉞ 表現の直接化・説明的要素の添加

㉞では語句の省略による表現の簡略について述べたが、㉞では語句の置き換えによる表現の特徴について考えていく。

㉞〔青〕院の御なやみ、神無月になりては、いと重くおはします。

世の中惜しみきこえぬ人なし。

〔相〕(傍線部) 世中をしみきこゆることかぎりなし。

青表紙本では「惜しまない人はない」と二重否定による裏返しの方で肯定を示すが、為相本では直接的表現をとっている。同じ内容表現しながらも、為相本は表現技巧の薄れた叙述であると言える。

さらた、

㉞〔青〕いと急に、のどめたるとおはせぬ大臣の、おほしもま

はさずなりて、

〔相〕いと急に、いちはやきころおはするおとどにて、あやしうおぼさるるままによりて、

のように、青表紙本では否定文から裏を暗示させる婉曲的表現だが、為相本では直接的表現になる。表現の優劣は別問題として、表現が直接的になれば、文は説明的にもなり理解は容易になる。

次の例は語句の置き換えによつて、文が直接的にそして説明的になった例である。

㉞〔青〕月は限なきに

〔相〕月はいとあかきに

為相本で文が説明的傾向を帯びるのは、語句の置き換えだけでなくつけ加えにもよる。

㉞〔青〕このついでにさるべきことども構へ出でむに、よきたより

なり、とおほしめぐらさるべし。

〔相〕これにつけても、だれもだれもさるべき事構へ出でむに、よきたよりと、いひひしきつべきことのはじめとおほす。

のように傍線部のつけ加えによつて大后の心中が具体的に示される。このように為相本は説明的要素を伴うことが多い。このことは、文章を解釈的に行っているのである。

㉞ 和歌的表現における特色

文章表現の単調化に係るものとして、引歌や、和歌的表現につい

て、かなり大きな省略・変改を示す独自異文が目立った。

㉑「青秋の花みなおとろへつつ、浅茅原もかれがれる虫の音に、松風すこく吹きあはせて、そのことも聞き分かれぬほど、

〔相〕秋の草みなおとろへて、浅茅原あはれる虫の音に、松原の風すこく吹きあはせたるにつけて、そのことも聞き分かれぬほどに、

㉒「青」かけまくはかしこけれどもそのかみの秋おもほゆるゆふだすきかな昔を今にと思ひたまふるもかひなく、とり返されむものやうにと、

〔相〕かけまくはかしこけれどもそのかみの秋おもほゆるゆふだすきかないましばしと思給ふるもかひなくとり返さんものやうになど、

㉓「青」鈴鹿川八十瀬の後にぬれぬれ伊勢まで誰か思ひおこせむ〔相〕鈴鹿川いしま（石間）の後にぬれぬれ伊勢まで誰か思ひおこせむ

例㉑の場合、青表紙本における傍線部「かれがれる」は、「枯れ枯れ」と「嗔れ嗔れ」を掛け、「浅茅原も枯れ枯れなる」と続き、「嗔れ嗔れなる虫の音に」と受けられ、和歌的表現をそのまま用いているが、為相本では、それがすっかり消えてしまっている。また

「松風」は、古注以来かならず引かれる「琴の音に峯の松風かよふらしいづれのをより調べそめけむ」（『拾遺集』巻八雑上）に拠るもので、次の「そのことも聞き分れぬ……」と照応する。この歌は、齋宮女御徹子女王の詠。作者は、「親添ひて下りたまふ」準拠になる人物であるので、大切な言葉であるが、為相本（この例に限る）では「松原の風」となっていて、引歌について注意は払われていないと見るべきである。例㉒では、青表紙本の傍線部「昔を今に」は、「いにしへのしづのをたまきくりかへし昔を今になすよしもがな」（『伊勢物語』三十二段）を引き、あとの「とり返さむものやうに」と呼応する。為相本の「いましばし」では、意味も落ち着かず、せつかく次に「とり返さむものやうに」とあるのが響かない。例㉓の青表紙本「八十瀬」は、源氏の贈歌に「ふりすてて今日は行くとも鈴鹿川八十瀬の波に袖はぬれじや」（青表紙本・為相本同じ）に答える歌としては、ぜひ欲しく、かつ「八十瀬」は、万葉集以来の歌語である。ただ「いしま」には、「やせせ」からの転々誤写の可能性は考えられる。

以上のように、為相本では、引歌や歌語に対して、かなり大胆にこれを切り捨て、複雑な背景を捨てる代りに、文意を取る傾向が見られたが、歌に關することでは、物語中の和歌における独自異文の多いことも注目された（注㉑）。

以上のように、為相本には表現に様々の特徴が、つまり単調化・簡略化・直接化そして説明的要素の添加といった面がある。これら四者は相反するようだが、文章の理解を助けることでは共通した性質を持っていると言える。為相本には文学的に優れた文章表現があるのではない。なるべく文脈をわかりやすく解釈しやすくした梗概的文章であり、その傾向は各特徴に現れているのである。

#### 第四章 河内本・國冬本との関係

これまでは、青表紙本との比較から為相本の特徴について考察してきたが、次には青表紙本以外の諸本と如何なる関係にあるかを調べることにする。

為相本と表現が似ているのは、まず河内本である。河内本は、「解釈を重要視する所謂校訂本文の性格を持つ」とまで言われるように(注⑨)、説明的要素が多い。この点においては、為相本は河内本に近寄っているのである(注⑩)。

(1)「霄」大将は、ありしにかはらずわたり通ひたまひて、

「相」大将の君なをかれはて給はずありしにことにかはらぬほどにわたり給つ、

為相本では少々表現は異なっているけれども、「ありしにかはらず」の説明語句(傍線部)がつけ加えられている。この部分の河内

本は、

「河」大将のきみなをかれずありしにかはらぬ程にわたり通ひたまひて、

となつて為相本と説明的な点で一致する。しかしながら表現全体としては、例に示すように河内本の方が青表紙本に近い表現を多く持っている。これは、青表紙本とそれより後に作成されたと考えられる為相本との間に、河内本の存在を暗示するものである。

同じことが次の例においても言える。

(2)「霄」朝夕に見たてまつる人だに、飽かぬ御ありさまなれば、

「相」朝夕に見たてまつる人だに、みるめあかずおもへる御ありさまなれば、

「河」あさゆふみたてまつる人だに、みるめにあかぬ御ありさまなれば(注⑪)、

為相本と河内本は近接した表現で、この例においても、青表紙本と為相本との間に河内本を置くと、表現の移り変わりが理解できるのである。

敬語については、河内本では敬語がそろう傾向があり、「たまふ」が多くそろえられて持ち込まれていると言われる(注⑫)。それは別の敬語動詞を持ち出してくるよりも、どの動詞でも「たまふ」をつけ加えることで、たやすく尊敬の意味を表現することができるか

らであると考えられる。河内本の賢木巻にもこの傾向が見られ、そして為相本にも同傾向はある。しかし、「たまふ」のつけ加えられる場所が河内本と同じ場合は少ない。為相本は、むしろ國冬本で「たまふ」がつけ加えられた場所と一致する場合が多い。

(3)〔青〕(中宮が) 心づきなくおぼされて、瓶にささせて、廂の柱のもとにおしやらせたまひつ。

〔相〕心づきなうおぼしなりて、かめにささせ給て、廂の柱のもとにおしやらせ給て。

〔河〕心づきなくおぼしなりて、瓶にささせて、廂の柱のもとにおしやらせたまひつ。

〔國〕心づきなくおぼしなりて、かめにささせ給て、廂の柱のもとにおしやらせたまひつ。

傍線部の表現をみていくと、為相本と國冬本で「たまふ」がつけ加えられ、一致している。

しかし、二重敬語の簡略化や敬語動詞の置き換えは、為相本が最も例は多いけれども河内本と一致する場合のほうが多い。よって、敬語の全体的特徴としては、為相本は河内本と似通っていると言える。第一章であげた、例(0)・(13)・(15)・(21)は、為相本と河内本とが一致している例であり、このことをよく示している。敬語の扱い方が為相本と河内本とで近似しているのは、敬語に対して相通じる認識

が両者に存在していたからだと考えられる。

為相本は、河内本だけでなく國冬本とも非常に接近する。それは多く説明的部分である。例(1)・(2)の部分の國冬本は、

(1)〔國〕大将君猶かれはずありしにことにかはらぬほどにわたり  
通ひ給つつ、

(2)〔國〕あさゆふにみたまつる人だに、みるめにあかずおぼゆる  
人の御さまなれば、

となっている。説明的要素を持つ三本を比較すると、三本が一致する場合も多いが、表現全体では為相本は河内本よりも國冬本に近い表現を持っている。

この國冬本の存在は、為相本の独自異文の発祥を知る手がかりとなる。

(4)〔青〕聞てえさせてもかひなきものごりにこそ、むげにくづほれ  
にけれ。

〔相〕(傍線部) しほれ侍りにけれ。

これは、青表紙本と為相本で全く表現が異なる場合で、青表紙本の本文を解釈すると為相本のようにになると考えられないこともない。そこでこの部分の國冬本の表現を見ると、

〔國〕(傍線部) むげにこそしほれ侍りにけれ。

となっている。青表紙本と為相本の間にも國冬本を置いて考えると、

國冬本は青表紙本の表現を独自の表現に置き換え、為相本は國冬本の表現を自本の表現としたと言える。このような場合をはじめ、國冬本は為相本よりも青表紙本に近い表現をしている。

(6)〔背〕後の御けしきは、いと恐ろしうわづらはしげにのみ聞こゆるを、かう親しき人々も、けしきだち言ふべかめることどももあるに、

〔相〕(傍線部) この親しき人々のかやうにけしきとりていふことども、

〔國〕(傍線部) この親しき人のかやうにけしきだち、言ふべかめることどももあるに、

右がその例である。そして以上のように考えてゆくと、別系統として扱われていたこれら三本が一連のものとしてつながってくるのである。

為相本には青表紙本は勿論、河内本や國冬本とのかかわりがあるが、平淡な文章への移行・修辭の減少や、挿入句の省略等の文章表現の単調化・簡略化による独自異文、解釈的でかつ梗概的な文章表第三章で述べてきたように為相本の特徴として見られるのである。

### Ⅲ 結論

私は、為相本の文章を青表紙本をはじめとする諸本と、様々の面

から比較してその特徴を考察してきた。そして、為相本が他本とはかなり性格を異にすることがわかってきた。

相違点はまず敬語である。為相本の二重敬語の簡略化からは、敬語の段階的敬意の差の消失がうかがえる。この現象は、為相本の敬語に対する態度による。この態度とは、この本の本文が作成された時代の敬語に対する考え方であって、平安時代のものとはかなり異なる。そしてそれは、為相本が青表紙本よりも後世に作成されたと考えられる可能性を物語っている。また、補助動詞「たまふ」がそろえられることは、「たまふ」が使用頻度の高い敬語であったこと、そして敬語が文章の中で有効なものとしてでなく、形式的に用いられていることを示すものである。

次は文章に取りくむ作者の視点の一元化である。青表紙本の本文は多元的視野から構成され、視点の異なる文が錯綜している。それは、語り地の文から機敏に作中人物の心中へ入ったりする。これらには、作者は勿論、読者(或いは聞き手)までもを作中世界に引き込む緊迫感がある。これに対して、為相本では視点の一元化の傾向があり、作者はある一定の位置から動かずに作中世界を語る。そのため文章が大変冷静になり、立体的文章から平淡な叙述に移る。

平淡な叙述は作者の視点の一元化からだけでなく、さらに文脈を中心とする傾向からもうかがえる。挿入句の省略に加えて、表現の

簡略化がその傾向をすすめる。修辭を減らして説明的要素を加えるために、文章が解釈的になる。以上のような現象は文章に梗概的性質を持たせると共に、表現上に文学的要素の少ない平淡な叙述にするのである。

このような性格の為相本は、如何なる目的のもとに作成されたのか。敬語は、この本の作成された当時の人々にわかりやすいものを用いたことが考えられる。そして文章は文脈に重点を置いて、しかも説明的要素を持っているので、この為相本は、人々に理解しやすい解釈的な本として生まれたのではないかと言える。

今までに述べた為相本の性格を考えると、他本とは違っており突然に生まれたかのようにである。しかし、青表紙本との比較だけに終わらずに河内本や國冬本へと視野を広げると、そこに為相本との近似性が見つけられる。青表紙本との全くの異文も、為相本との間に河内本や國冬本を置くことによって説明ができる。表現上の特徴においても、河内本や國冬本と切り離せない。つまり、為相本は、諸本の性質と独自の性質をあわせて作成されているのである。

別扱いにされている為相本も、他本との比較をすすめると、そこに一連のつながりが見いだされる。それは、あくまでも源氏物語を書写して作成しようとした、各本の作成者の共通の態度によるものである。決して、全く異なったものを作り出そうとしたのではない

ことがわかるのである。

#### △附注▽

(1) 玉上琢弥「敬語の文学的考察——源氏物語の本性(其二)——」

〔「国語国文」昭和二十七年三月号。〕「源氏物語研究」源氏物語評釈別巻一所収・昭和四十一年三月。

(2) 為相本の「たまはせ」は、山賊に対する源氏直接の行動ではなく、召使いの介在が考えられる。

(3) 為相本にもう一例あり。

〔青〕春官の御ゆかりいとおしう思給へられ侍とそうし給。

〔相〕(傍線部)きこえ給。(御物本も同様である。)

また為相本以外の異本にも同じような例がいくつもある。

#### ①薄雲

〔青〕つねの御ことのはにかはらずそうし給へば

〔青〕御物本(傍線部)申給へば

#### ②若菜上

〔青〕よるもさふらひがたくのみなんとばかりそうしてやみぬ。

〔別〕阿里莫本(傍線部)聞えてやみぬ。

#### ③竹河

〔青〕ついであらばほめかしそうし給へ

〔別〕伝西行筆本（静嘉堂文庫蔵）

（傍線部）申給へ

- (4) 但し、青表紙本中の肖柏本と三條西家本のこの部分の表現は、  
為相本と同じである。

- (5) 根来司「源氏物語の草子地」（『国文学—解釈と教材の研究』  
昭和四十七年十二月号。）

- (6) 「青」旧き官は、かへりて旅ごちしたまふにも、御里住み絶え  
たる年月のほど、おほしめぐらさるべし。

この傍線部について『湖月抄』は、「草子地也寵愛の故與」と  
述べている。

- (7) 根本正純『源氏物語の草子地・諸注と研究』（昭和五十七年五  
月。）本文・諸注編「賢木」巻。

- (8) 青表紙本中の肖柏本と三條西家本のこの部分の表現は、為相本  
と同じである。

- (9) 『源氏物語大成巻七』第二部源氏物語諸本の系統・第四章河内  
本の性格による。

- (10) 本論では、「源氏物語大成巻一」の「さか木」における「河内  
本」五本の表現がすべて一致している部分を「河内本」本文の  
用例とした。

- (11) 大成によると河内本は、「にるめにあかぬ」となっている。し

かし、「みるめにあかぬ」については、「伊勢の海人の朝な夕  
なにかづくてふみるめに人を飽くよしもがな」（『古今集』巻  
十四恋四・六八三）という引歌もあり、「にるめ」は「みるめ」  
の誤写ではないかと考えられる。

- (12) 根来司「平安女流文学の文章の研究・続編」（昭和四十八年二  
月。）V 平安女流文学の敬語。「鎌倉時代の文語における『給  
ふ』」（『国語と国文学』昭和三十六年一月号。）

為相本の独自異文を持つ作中人物の和歌を以下に列挙する。

- (1) 「青」少女子があたりと思へば辯葉の香をなつかしみてめてこそ  
折れ

〔相〕少女子がありかとおもふ辯葉の香をなつかしみてめてこそ  
折れ

- (2) 「青」おほかたの秋の別れもかなしきに鳴く音な添へそ野辺の松  
虫

〔相〕おほかたの秋の別れのかなしきに音な鳴き添へそ野辺の松  
虫

- (3) 「青」國つ神そらにことわる仲ならばなほざりごとをまつやただ  
さむ

〔相〕國つ神そらにことわるものならばなをざりごとをまつやただ  
ださむ

(4)〔奇〕そのかみを今日はかけじと恐ぶれど心のうちにもものぞ悲し

き

〔相〕そのかみを今日はかけじとおもへども心のうちにもものぞ悲

しき

(5)〔奇〕さえわたる池の鏡のさやけきに見馴れしかげを見ぬぞ悲し

き

〔相〕さえまさる池の鏡はさやけきに見馴れしかげを見ぬぞ悲し

き

(6)〔奇〕年暮れて岩井の水もこほりとち見し人かげのあせもゆくか

な

〔相〕年暮れて岩井の水もこほりとち見し人かげもあせもゆくか

な

(7)〔奇〕心からかたがた袖をぬらすかなあくとをしふる声につけて

も

〔相〕心からかたがた袖のぬるるかなあくとをしふる声につけて

も

(8)〔奇〕嘆きつつわが世はかくて過ぐせとや胸のあくべき時ぞとも

なく

〔相〕嘆きつつわが身はかくて過ぐせとや胸のあくべき時ぞとも

なく

(9)〔奇〕ながき世のうらみを人に残してもかつは心をあたと知らな

む

〔相〕ながき世のうらみを人に残してもかつは心のあたと知らな

む

(10)〔奇〕風吹けばまづぞ乱るる色かはる浅茅が露にかかるさきかに

に

〔相〕風吹けばまづぞ乱るる色かはる浅茅が露にまよふさきが

に

(11)〔奇〕そのかみやいかがはありしゆふだすき心にかけてしのぶら

むゆゑ

〔相〕そのかみやいかがはありしゆふだすき心にかけてしのぶ

きこと

(12)〔奇〕月のすむ雲居をかけてしたふともこの世の闇になほやまだ

はむ

〔相〕月のすむ雲居をかけてしたふともこの世の闇にかつやまだ

はむ

賢木巻は総歌敷三十三首、うち十三首(前出例⑩)「いしま」を

加えて)に、為相本では独自異文があることになる。